

---

# 生存者 0 名

悲しみの楽園

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生存者0名

### 【Nコード】

N1534G

### 【作者名】

悲しみの楽園

### 【あらすじ】

記憶を失うことを引き換えに特殊能力を得る事が出来る。主人公谷健一は一人の女性から取引を持ちかけられ、記憶と引き換えに命の長さを自由自在に操る力を得た。だが失っていく記憶の中にはあまりにも残酷な答えが隠されていた。

## はじまり(前書き)

一応15禁設定しましたが、残酷な描写というよりも残酷な結末、ストーリーになりそうなので警告カテゴリに入れてみました。考えさせられるような終わり方が苦手の方はあまりお勧めしません。

## はじまり

命の長さを操る事が出来る。

それに気付いたのは母親が肺癌にかかり、余命3ヶ月と医師から診断された時だった。

当時まだ小さかった俺は母が重い病気で入院しているという事がいしかわからなく、いつか

は退院出来るけど今は休んでなければいけないという楽観的な認識しかなかった。

いつものように小学校のホームルームの終わりを告げるチャイムがなった後、一目散に母のい

る病院へと駆けていった。

「ちょっとそこの僕」

突然30代ぐらいの女性から呼び止められた。急いでいた為どうしようかと少し考えたが、耳

を傾ける事にした。

「お姉さん、今急いでるんですけどどうかしたの？」

すると女性は口元を緩ませ、少しずつこちらへと近づいてきた。

「お母さんを助けたいんでしょ？」

俺は返事をする代わりに小さくうなずいた。

「なら取引をしましょう。貴方にお母さんを助ける力を上げるわ。その代わり、記憶をいただ

けないかしら」

これが全ての始まりだった。こうして俺はこの得体の知らない女性から命の長さを操る力とい

うものを得て、母を病気から救う事が出来た。

しかしそれからの人生というのは茨の道だった。記憶を失うということは母親をも忘れてしま

うという事だ。

そしてこの人の命を操る能力を使う度に記憶を失い、大切なものを助けると同時に大切な記憶

や思い出を失った。

そんな俺にひとつの転機が訪れた。取引をしてから10年の歳月が流れたある日のこと。川澄

由美子という女性との出会い。彼女もまた記憶を失うと同時に人の感情を操る事が出来る人間

だった。

意中の相手を好きにする事も出来るし、嫌いな人間を死に追いやるほど悲しませる事も出来る

特殊能力の持ち主だった。

「川澄さんもあの女性から取引を持ちかけられたんですか」

時刻はとうに深夜二時を回っていた。喫茶店には俺と川澄さん以外の客は誰もいない。

「ええ、私も取引を小さい頃に持ちかけられてね。

その時、大きな悩みがあつて解決しようとする一心で条件に応じたの。何に悩んでいたかは貴

方と同じでもう思い出せないけど」

コーヒーを一口、口にする。外では雪が舞っていた。

「そうですね、川澄さんはどうやって俺のところまでたどり着いたんですか。確か、もう10

年も前の話ですよね」

すると川澄という少女はばつが悪そうに表情を歪めた後、静かに目を閉じた。

「さあ、覚えてないわ。何せ私も小学生の頃に記憶を失ったんです

もの。

それから能力を使う度にずっと。気がついたら貴方の前にいた。ただそれだけよ」

何かが引つかかる。よくわからないがこの川澄という女性どうも信用ならない。能力を使えば

記憶を失うのは事実だが、それは誰に使ったかとかその程度が消えるはず。少なくとも俺はそ

うだ。もしこの川澄という女性も同じように記憶を失うというならば俺に能力を使わない限

り、俺と出会った経緯が不明なんて事は考えられない。

もしそこまで記憶の障害が激しいならば能力を持ったこと、10年前の取引も忘れてしまっ

もおかしくない筈だ。この女は嘘を吐いている。直感的にそう感じた。だが、理由がわからない

い。

「えーっと、健一君。川澄さんじゃなく由美子さんで良いから」

健一とは俺のことだ。

「わかりました由美子さん。今日は遅いですし話の続きはまた明日にしましょう」

「そうね、ではまた明日。場所はこの喫茶店で時間は深夜1時で良  
いかしら」

深夜1時？

「え、ちょっと待って下さい。いくら何でももう少し早い時間の方  
が」

俺の返事を最後まで聞く前にこの川澄由美子という女性は店を出て  
行った。去り際に酷く悲し

そうな目をしたように見えたのは気のせいだったのだろうか。

## 過去

あれから一睡も出来なかった。俺の前に突如現れた川澄由美子という謎の女。自分の記憶と引

き換えに特殊能力を使う事が出来る唯一の存在。

だが実際に彼女が能力を使う場面を見たわけでもなく、まだ彼女の話の全てを鵜呑みにする事

は出来ない。もしかしたらどこかで俺が命を操る事が出来る話を聞いて、かまをかけているの

かもしれない。

とにかく信用してはいけない、そう俺の直感が告げていた。

「またあの喫茶店に行くのか」

興味はあってもやはり時間が時間という事もありめんどくさい。今はたまたま大学の冬休みだ

から良いものの、普段は深夜に出歩くほど暇人ではない。しかし約束の時間にはまだ余裕があ

る。こういう日はゲームセンターにでも遊びに行つて、日頃の疲れをおとした方が良いだろ

う。そう思って部屋を出ようとした直後、ポケットの中の携帯が振

動した。

「まったく、気がたってるって言うのに誰からだよ」

電話の主はアドレスに登録されていない番号からだった。

「もしもし」

「もしもし由美子です」

背筋が凍りついた。俺はまだこいつに携帯の電話番号を教えていない。

「いきなりの電話ごめんなさい。驚いたかしら？」

どうすれば良い。多分ここで電話を切ったところでこの女から逃れられない。

「何のようだ。」

精一杯声を振り絞る。

「待ち合わせ明日の午前一時って言ったけど、やっぱり今から会いたくなって」

真意は分からないが、夜会つよりも昼の方が安全のような気がする。仕方なくこの女の要求に

了承し喫茶店へと向かう事になった。

「ごめん健一君。待った？」

大きく手を振りながら俺の席の隣へ腰をおろした。普段から女慣れしていないせいか、こういう

シチュエーションはものすごく恥ずかしい。

「どうしたんだよ、急に」

この子は黙っていれば可愛い子だと思う。毒舌って訳ではないが、冷徹な面が多々見受けられ

るのが難点。それさえなければ他の男は放っておかないだろう。

「健一君、昨日記憶と引き換えに命の長さを操る事が出来るって言うてたわよね？」

「それがどうした」

「やっぱり覚えてないんだね」

川澄は薄気味悪く笑っている。やはりこの女とはどこかで会っているのか。そうすれば俺の記

憶を知っているかのような素振りも納得がいく。俺だけが忘れている過去。

「忘れていたようだから教えてあげる。貴方が契約したのは30代

の女性じゃないわ。同い年

の10歳の女の子。どう思い出してきた？」

言われてみればそのような気もするが、やはり明確には思い出せない。

「その女の子、私だもの」

瞬時に理解する事が出来なかった。思考回路が停止する。

「え？ そんな筈はない。俺は確かに中年の女性に力を貸してあげようか、って。」

「言い切れるの？」

川澄は何かをはかっている様に疑問を投げかける。自信はないがこの女ではない。いや、そう

に違いない。

「悪い、今日は帰る。少し気分が悪くなった。」

ちらりと川澄を見る。無表情で全くよめない。

「別に良いけど、何か知りたくなったらすぐに私の所に来てね」

俺は逃げるように喫茶店を後にした。ただ去り際に

「あなたは人の命を操るために記憶をなくしたわけじゃない。」

消したい過去があつたために仕方なく命を操っているのよ」

川澄はそのような事を言っていた。

## シュレディンガー

「一家惨殺事件ですか」

警部は神妙な顔つきで答えた。

「犯人はその家に住む10歳の子供だそうだ。依然逃亡中で詳しい事はわかっていない。」

10歳という年齢に周囲の警察官も動揺を隠せない。

「その、よろしいですか警部」

「何だ？」

「その10歳の子供というのは男ですか、女ですか？」

「………だ」

警部の声はパトカーのサイレンの音でかき消された。

「うわああああっ」

何だ今の夢は。川澄と会って早くも2週間の月日が流れていた。俺はあれから喫茶店へは足を

運んでいない。世の中には知らない方が幸せな事もある。少なくとも

も川澄が言おうとしている

事は知らない方が良い事だ。

しかしあの女が言っている事はどれも信憑性が低く、信用に値しない。ただ携帯の電話番号を

入手していたという点を考えると、

1、喫茶店で川澄と会ったのは偶然ではない。

2、過去に電話番号を交換するほどの仲であった。

3、しかしそれ以外の川澄の主張を証明できるものはない。

この3点だ。

「って、探偵でもあるまいし分かる訳ないだろう」

もうこの事は忘れた方が良いのかもしれない。そう自分に言い聞かせて足早に大学へと向かった。

た。

「1コマ目は量子力学か」

朝から重い科目とは、月曜日ほど憂鬱なものはない。

「健一おはよう。朝から浮かない顔してるね。長期休暇のときに何かあったの？」

こいつは長谷川 舞。幼馴染で幼稚園から大学まで一緒という今時珍しい奴だ。

「ちよつとな」

考える事が多すぎて今は話す気になれない。いや、待てよ。舞なら10歳の俺を覚えているか

もしれない。俺が知らない事を知っている可能性は十分あり得る。

「なあ舞、俺小さい頃・・・そうだな、小学4年生あたりってどんな奴だったけ？」

さすがにいきなりこの話題は不自然だったか。

「小4？ああ・・・」

どうも歯切れが悪いな。

「どうしたんだ？聞いたらずい事でもあったか？」

急に教室の扉が開く。バッドタイミングで担当の助教授と大学院生が入ってくる。

「今日は抜き打ちでテストをする。シュレインガー方程式を抑えておけば解ける問題だ。参

考書は机の中に。」

聞きそびれてしまったか。だが反応から見るにあまり良い事ではなさそうだ。

テストが終わったら舞に続きを聞く予定だった。

だが、大学のテストというのは開始30分で途中退出が認められる。舞は30分経つたと同時

に去るように教室を出て行ってしまった。さすがに先ほどの質問をするために舞を追いかける

わけにもいかない。

「そんな事聞くためにテスト切り上げてきたの？あんなバカ？」

なんて舞に言われるだろう。舞はこの学校でも成績優秀だから30分程度で解けるのかもしれない

ないが、俺にはそこまでの器量がない。

「やはり、川澄に聞かなければ進めないのか」

「よんだ？」

隣に満面の笑みの川澄由美子。

「ば、化け物」

なんで大学内にこの女がいるんだ。

「あら、女の子に対して随分な言い草ね。健一株大暴落中よ。1000円切ったわ」

「それより答えろ。なんで由美子さんがこんな所にいるんだよ」

川澄は面倒くさそうに溜息をつく。

「喫茶店にこないからでしょ。これコーヒー2週間分の領収書。健一君につけといたわ。」

次払っておいてね」

1万円越してるじゃないか。しかも毎日ケーキ食べてるし、くそっ、こんなの払えるか。

がつんつと言ってる。女だからって甘やかされると思うなよ。

「すみませんでした、由美子さん」

「よろしい」

弱すぎるぞ俺。将来尻にしかれるタイプだな。

「で、健一君。何か知りたい事があるんでしょう」

「.....」

いざ聞こうとなるとあまりにも多すぎて何から聞けば良いのか分からない。俺が躊躇している

のを見て、川澄はニヒルに笑った。

「健一君、量子力学って事は………物理学科なんだね。だったら物理の質問良いかしら。」

失礼ながら見た感じ、川澄はあまり学があるようには思えない。

そう難しい質問はしてこないだろうとよみ、俺は川澄の提案に了承した。

「シュレディンガーの猫って知っているかしら？ある密閉された箱の中に1匹の猫を入れる

の。そこに殺傷能力のきわめて高い毒ガスを入れていく。当然いつかは猫は死ぬわ。でも箱の

外にいる観測者には猫が生きているか死んでいるかわからない。つまり生存率50%という奇

妙な現象が起こるわけ。

でも観測者が箱を開けてしまえば猫の生存状況が明確になり、生きていれば生存率100%、

死んでいれば生存率0%。猫の状態は変わらないのに観測者の行動で猫の生死を操る事ができ

る。面白いとは思わない？」

「驚いた。由美子さんが物理に詳しいとはね。所々違う所があるけどシュレディンガーの話は

大体あつてるよ」

違和感を感じる。生存率を操る事が出来る？

俺は……そんな筈はない。

「違う。シュレディンガーと俺の能力は関係ない」

川澄は返事の代わりに薄気味悪く笑うだけだった。

## 取引の真相

シユレディンガーの猫。川澄由美子が言おうとしているのは恐らくこういう事だ。俺はある事

件から目をそらしている。その事件の内容までは記憶がぬけている為分からないが、人の生死

に関わる事件であり、最悪自分が手を下してしまった可能性も否めない。もし川澄の言葉を全

て信じるなら、俺は過去の記憶を消すために人の命を操っている。

つまり、自分の身勝手に過去に関係のない人を殺傷してしまったと考えるのが自然である。

しかし肝心の何の為に記憶を消そうとしたのかが不透明で、

多分これも川澄に聞かなければ分からない事だろう。疑問点はまだある。この女は必要以上に

俺の事を知りすぎている。勿論、話の全てを信用しているわけではないが、能力を得る事の取

引、事件を知っているかのような素振り、事件の目撃者もしくは共犯者という可能性も十分考

えられる。考えられるんだが……

「フルーツパフェおかわり」

この女、大食い選手権にでも出場するのだろうか？

川澄は5杯目のパフェを食べ終わり、満面の笑みで6杯目にチャレンジしようとしている。

「俺今週カップめんなんだ」

わざと聞こえるように皮肉を言っただけだ。

俺が出来る精一杯の抵抗だ。キャバクラに貢いでるサラリーマンの気持ちは今ならよく分か

る。何か文句でも？ と一瞥し、またパフェに夢中になる。対する俺はというと水をちびちび

とすすっていた。そろそろ本題を切り出すか。

「由美子さん俺の失った記憶なんです、そろそろ教えてもらえませんか」

機嫌を取るように下手に出る。この女からしか過去の記憶を取り戻せない。

「取引の内容、まさか忘れちゃったわけじゃないでしょう。記憶を失うことを引き換えにこの

取引は成立しているの。どうしても知りたいなら自分で思い出すしかないでしょ」

やはりそう簡単には口を割らないか。正直な話俺もあまり聞きたくない。

しかし人を殺めている可能性がある以上、知らないふりをするわけにもいかない。

「でも、由美子さんは取引の時の話やシュレディングアの猫の話を教えてくれたじゃないです

か。せめてヒントぐらい教えてくれても」

頼む、そのパフェ1つ1000円もするんだよ。貧乏学生には痛すぎる出費なんだ。

「ヒントねえ、このまま思い出せないっていうのも幸せかもね。私は、思い出して欲しいんだ

けど………ヒント終わり。おかわり」

ダメだ。これでは埒が明かない。もうこうなったら核心に迫る質問をしよう。少なくとも川澄

は俺に取引の時の事を思い出して欲しいと思っている。取引上、言う事が出来ないというのは

おいといてだ。

「わかった。全部を聞こうとはしない。だが思い出せないんだ。だからせめてこれぐらいは教

えて欲しい。俺が能力を使った回数と由美子さんが能力を使った回数を教えて欲しい。それと

出来れば理由も。これぐらいはヒントとして聞きたい」

川澄が目を外に向ける。積もった雪が太陽に照らされていて、まるで広大な銀世界に俺たちだ

け取り残されているようだった。

「私は0回」

川澄は遠い水平線を見つめている。俺も目で追ったが何を見ようとしているのかは分からな

かった。

「健一君は1回。自分が死んだ事を忘れるためにね」

## 取引の真相（後書き）

ご愛読いただきありがとうございます。

読んでいただいている皆様には頭が上がりません。

一応今回の話で、生存者0名は後半戦に入ります。

経験が浅い分、至らない所があるのは重々承知しております。

ですが、この生存者0名を通して最後まで皆様を楽しませる事が出来れば、ライターとしてこれ以上の幸せはありません。

では残り半分となりましたが、

どうか宜しくお願いいたします

## 告白（前書き）

この話から解決編となります。  
初めて来られた方は最初から読むことを推奨します。

## 告白

私川澄由美子には好きな男の子がいます。その男の子は優しくて、笑顔が可愛くて、

「大好きだよ」

って言うてくれる。当時10歳の頃の私の初恋の男の子。それが健一君だった。私が人とは変

わっている能力を持っていても、彼は私の事を避ける事なく異性として接してくれた。

私は彼さえいれば、例えクラスの皆からいじめられていても、父が私の大好きな健一君を憎ん

でいても、母が末期癌で余命三ヶ月と言われていても、全ての負の感情に耐える事が出来た。

クラスの皆からいじめられていたのは何も私が能力を持っていたからではない。能力を使わな

ければ、誰にも化け物と気付かれないからだ。私がいじめられていた理由。

それは……川澄健一とは双子の兄妹だったからだ。血が繋がっているのに私は兄を愛してし

まった。クラスの皆は気付いていた。あの舞という幼馴染も。

それなのに兄は私の気持ちに気付かず、何をするにもどこへ行くにも一緒にいてくれた。その

優しさは嬉しい気持ちと切ない気持ちが同時にこみ上げてきて、最愛なる兄からの唯一の苦し

みだった。

全ての人、物、法則を憎んだ。

やがて心の奥底からの激しい憎悪が善意という殻を壊し、私の中で1つの決断に至った。愛し

すぎたゆえに許されることのない罪。誰もが認めてくれない恋愛。

だから私は

「一家惨殺事件ですか」

「犯人はこの家に住む10歳の女の子だそうだ」

私は

「お兄ちゃん、今日もお母さんの所に行くの？」

「ああ」

「待ってよ、じゃあ、取引しようよ」

皆を殺してしまった。

## 兄妹

「取引しよう」

妹から発せられた言葉に俺は動揺を隠せなかった。取引とは川澄家に伝わる能力の事。その能

力は生まれもって受け継がれており、内容も個人差がある。しかし大体は記憶を消す事が主で

その副作用が違ってくる。

俺の場合は命の長さを操る。妹の場合は人の感情を操る。妹はその力を使うと言ったのだ。

しかし言葉とは裏腹に迷いを生じているようにも見えた。

「この能力を使って、お兄ちゃんが私の事を好きになってくれても、私がお兄ちゃんとの記憶

や思い出をなくしちゃったら意味ないよね」

俯いている妹に兄として、いや一人の男として何も声をかけてあげる事は出来なかった。気付

かないふりをしているだけで、本当は妹が俺のことを異性として好きだった事にはずっと前か

ら気付いていた。

でもそれは許されない事なんだ。俺も初恋の相手は由美子だったよ。兄の俺がすっかりしなけ

ればいけない。ダメな物はダメと手本を見せる事が先にこの世に生まれてきた者としての務め

だと思っっている。だから俺は自分に嘘をついた。

「何も用がないなら、母さんの見舞いに行くぞ」

すると妹は母の見舞いに行く前に、一度家に戻りたいと言った。何でもお母さんの為にお小遣

いを貯めていて、この日の為にお花を買っていたらしい。

「家に戻るのは良いけど、日が暮れる前に病院に行きたいから早くするんだぞ」

俺は焦りを感じつつも、妹共に一度帰宅した。玄関のドアを開けるとすぐに家の中の異変に気

付いた。

「血生臭い」

俺は電気をつける事も忘れ、暗い廊下を進んでいった。臭いは居間からだった。あたり一面血

だらけで床は血によってねっとりとしており、いつもは酒に入り浸

ってる父の姿が見あたらない。

い。

その後悔した。なぜ入り口で警察を呼ばなかったのか。多分、まだ10歳の俺にはそこまで

頭が回らなかったんだと思う。奥の部屋まで入ってきてしまった。犯人と一緒に。

「お兄ちゃん」

妹に後ろから呼びかけられたが、振り向く事は出来なかった。背筋が凍るほどの今までに聞いた

た事のない冷徹な声だった。妹は俺の沈黙を最期と受け止めたのか、手に持つ包丁で背中を突

き刺した。

何度も、何度も。

俺が悲鳴をあげるのをやめても手を止めなかった。妹は大粒の涙をこぼしながら、その小さな

体に1つ1つ自分の罪を刻み込んでいった。

俺は薄れゆく意識の中で最後の力を振り絞り、能力を使った。

## 兄妹（後書き）

皆様、

ここまで生存者0名を読んで頂き  
ありがとうございます。

お疲れ様です。

次を最終話としたいんですが、

今グッドエンディングとバッドエンディング二つ考えていまして、  
どちらにするか大変迷っています。

作者としてはバッドエンディングよりなんですが、

この兄妹をこれ以上追い詰めるのも

どうなのかな・・・って気持ちもあり、

二つエンディングを書くころかなとも考えております。

それで読者様のあうエンディングの方を適用していただければ良い  
かと。

少し長くなりましたが、とりあえず

次の更新は2、3日あけさせて下さい。

楽しみに読まれている読者の方々には申し訳ないんですが、

最終話については揺れている部分があるので

何卒ご理解の方お願いいたします。

そして

10年後。

川澄由美子は自身の手で殺したはずの兄の所に会いに来ていた。俺は一度能力を使った事、過

去の記憶を消すために命の長さを操った事、自分たちの面識は初めてではなかった事、10年

前の一家惨殺事件の事、ここに来てようやく全てを思い出すことが出来た。由美子も俺が過去

の記憶を取り戻した様子に気付き、複雑そうな顔をしていた。

「場所を変えよう」

喫茶店の雰囲気急に落ち着かなくなり、由美子に公園に行く事を提案した。先程の様子から

一変した彼女は返事の変わりに、首を一回縦に振るだけだった。俺達は店を出て公園までの

道のりを様々な事を思い巡らせた。

由美子はなぜまた俺に会いに来たのか？　そこまでして思い出して欲しかった理由は何なの

か？　確か俺と再会した日。次の待ち合わせ時刻は深夜一時と言っ

た。そして実際に呼び出さ

れた時刻は早朝。ただ話したい事があるから、もしくはあいつの自己中心的な性格から気まぐ

れの時間変更だと思っていた。

でももし、10年経っても警察の手から逃げているのだとしたら。俺は思い出さなければなら

ない記憶を今の今まで忘れ、最愛なる妹に全ての罪を背負わせてしまった事になる。

俺はあの事件の後、事件関連の記憶を全て失い街を転々としてきた。しかし運良くアルバイト

先の老人夫婦に面倒を見てもらい、何不自由のない生活を送ってきた。

だが妹はどうだったのだろうか。隣を歩く妹の顔を見る。真っ直ぐ前を向いて、何かを悟って

いるようにも見える。

「もうすぐ、公園だね」

視線に気付いたのか、それまで黙っていた妹が口をあけた。俺は慌てて目をそらした。

「そうだな」

未だに迷っていた。自首させるべきなのか、それとも別の方法があるのか。

「あのベンチに座ろうか、話したい事もあるでしょ」

そう言うと先にベンチへと走っていった。喫茶店から公園までの15分足らずの道のり。たい

して考えをまとめる事も出来ず、ベンチに腰かけ話を切り出した。

「これからどうするつもりなんだ？」

答えは分かりきっていても、この問いを聞かすにはいられなかった。

「自首するつもり。健一兄さんは一命をとりとめたかもしれないけど、父を殺してしまった事

に変わりはないわ」

俺はこういう時兄としてではなく、一人の男としてどうあるべきなのか。本当に妹の意思を尊

重し自首させるべきなのか自問いした。

「そうか、自首するんだな。偉いぞ」

また自分に嘘をつこうとしていた。

「うん、ありがとう。私兄さんと兄妹で良かった。」

ベンチから立ち上がる。俺はまた何も言う事が出来なくて、警察の元へ歩き始める妹の後姿を

見守るだけだった。

少しずつ妹との距離が開いていく。さようならも、ありがとうも、好きだった事も伝える事

が出来なくて、自分に対する情けなさや悔しさから涙が溢れ出した。

妹が俺の事を好きだと明かしたあの時も。

「何も用がないなら、母さんの見舞いに行くぞ」

違う、能力なんか使わなくても好きだと言ってやれば良かったんだ。だから俺は、もう後悔し

ない為にも言わなければならぬ。

「待てよ」

妹がまた戻ってきて欲しい一心で叫んだ。

「一緒に逃げよう。10年逃げ切ったんだ。時効までの残り5年間もきつと逃げ切れるさ」

前を歩く妹が足を止める。だが、俺の方を振り返ってはくれなかった。

「逃げようってバカじゃないの？ 貴方正気なの？ 私は一度貴方を殺したのよ。ううん、そ

れだけじゃない。私と一緒にいれば社会的地位も抹殺されるわ。下手すれば共犯として裁かれ

てもおかしくないのよ？ それでも良いの？ 私は、殺人鬼は一人で十分よ。お願いだから、

そんな事言わないで」

10年前のあの事件。

鑑識の結果、父親と10歳の兄両方の血液反応が部屋から検出されるも、部屋に残された遺体は

惨殺された父のみだった。警察は唯一の親族である母親に事情を聞くこととするも、病状の悪化

から二度と返らない人となった。完全に迷宮入りするかに思えた事件。しかしマスコミが過剰

にこの事件を取り立て、少年法の改正が大きく騒がれた。

その結果、10歳の少女にも責任能力が問われるようになり、由美子に対する偏見は見るに耐え

ないものだった。もし今由美子が自首すれば、あらゆる報道機関から面白おかしく取り上げら

れ、

非人道的な殺人鬼。悪魔に心を売った少女。殺人罪の時効破棄、検察側は死刑を求刑。

そうなるのは目に見えていた。

10mは離れているであろう距離。それでも一目で妹の小さな体が震えているのが分かった。

泣き顔を隠そうとしている仕草が、より一層俺の心を締めつけた。

前に進めば死刑。自殺をしに行くようなものである。

「一緒に逃げよう。由美子だけに罪を背負わせない。俺は守りたいんだ。ずっと由美子の事が

好きだった。今も、全てを思い出してもその気持ちは変わらない」

由美子は消え入るような声でバカと言った。俺はその返事が嬉しくて由美子を力いっぱい抱き

しめた。

「今まで忘れててすまなかった。本当によく戻ってきてくれた」

辺りは日が落ちかけて、一日の終わりを告げようとしている。公園の遊具で遊ぶ子供ももうい

ない。俺達は月明かりが照らす前に公園を後にした。

1年後、俺は東京の大学を中退し杜の都仙台へと都落ちしていた。妹はというと、朝早くからス

ーパーのパートへと出かけており、昼は赤ちゃんの面倒を見たりと良き母の姿となっていた。

俺は大学での知識を生かし、小さな個人塾の講師をしていた。都会生活に比べれば、ここでの

生活は時間がゆっくり流れているように感じる。

時折、東北紙に一家惨殺事件の行方は如何に？ と騒ぎたてる記事があったが、長らく続いた

世間の関心も大分落ち着きが見え始めていた。

当たり前の日常。家族の温もりを取り戻した俺たちにとって、この繰り返される平凡な日々

が、人一倍幸せに感じた。

「さて、家に帰るか」

生徒たちを送り出した後、一人塾を後にする。外ではあの時と同じように雪が舞っていた。

「あの日からもう1年経ったのか。」

思えば、喫茶店で10年ぶりに再会した妹の顔を忘れるなんて間抜けな話だよな。あいつは10年

経っても覚えていてくれてたみたいだけど。家に続く雪道を一步步歩いていく。周りに高層

ビルや建物はなく、田や畑がどこまでも続いている田舎道。

やがて古びたアパートのドアの前で立ち止まる。俺達兄妹は決して罪から逃げたわけじゃな

い。なぜならあの日、俺は自分の命だけではなく、由美子の命も延ばしたからだ。

死ぬ事が許されない、永遠に罪の意識について考えていく。それがせめてもの罪滅ぼしと感じ

たからだ。

親殺しの罪。警察は今血眼になって俺達兄妹を追っている。いつ捕まるか分からない、いつこ

の日常が終わるか分からない。そんな不安定な日々でも、この限られた時間を共有する事に俺

達は幸せを感じている。

「おかえりなさい、健一」

由美子がドアを開ける。部屋から流れてくる暖かい風によって、おいしそうな晩御飯の臭いが

運び込まれてくる。パパお帰り。俺達の双子の赤ん坊も優しく出迎えてくれた。

「今日は健一の大好きなシチューよ。冷めないうちに食べましょう」  
どちらともなく唇を交わす。俺達は互いの罪を受け入れ、死ぬ事もなく永遠に生きていく。亡

き父と母への罪を一生かけて償うために。

## そして（後書き）

読者の皆様お疲れ様でした。最後まで読んで頂きありがとうございます。ごまします。

この作品を読まれてどうでしたか？ 面白かった、つまらなかった。それぞれ感想があるかと思えます。

前回の後書きの件ですが、迷った末バッドエンドを却下しグッドエンドを書いてみました。

また作中の事を少し話させて頂きますと、伏線の回収にとても苦労しました。母親は生きているのか、死んでいるのか。失われた記憶とその辻褃合わせ。由美子と健一の過去の関係などなどあげたらきりがないぐらいあり、いかに矛盾点を抑えるかが今回最大の争点となっていました。

とはいえ、第一作ということもあり、誤字脱字、文法上のミスなど読まれていた読者様には大変お見苦しい所を見せてしまい、申し訳ありませんでした。

一応1話目のはじまりから作者の気付く限り文章上の間違いは訂正してみました。

最初に比べれば少しは良くなっているかと思えます。後経験が浅いたためか、プレッシャーがすごくかかり、恥ずかしながら何度も挫けそうになりました。

それでも読者様があつてこそ、最後まで書ききる事が出来ました。本当にありがとうございます。

ではまた、次の作品でお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1534g/>

---

生存者0名

2010年10月12日02時39分発行